

## 入選

### 届け、自分の声

香川県 坂出中学校

一年 堀井 悠太

僕は生まれつき、あまりしゃべることができない。母いわく、どもりというらしい。

そんな僕は、常に困っている。友だちとの会話においては、自分が声を出しにくいから、自分の意見を聞かれず進んでいく。学校生活では、発表会の練習で声が出ず、赤っ恥をかいたこともある。家族との話にも、声が詰まることもある。

声が出にくいと理解をしてくれる友だちもいたが、少しキレ気味な友だちもいた。やっぱり僕は、変なんだと思いながら、中学校に入学し、学級委員となった。毎時間の号令、交通安全教室の代表の言葉、声を出すという活動が増えていき、毎日が緊張の生活。それが原因なのかはわからないが、臆病な性格にもなってきた。

友だちに話しかけられても、長い言葉を話すことは難しく、「うん」や「おお」という言葉が増えていき、「最近、俺に冷たいな」と言われたこともあった。

そんな中、いつもの号令で、10秒間くらい詰まってしまった。先生もこちらを見ている。(あ、やばい……) そう思っていたら、ある友だちが、

「隣のクラスの号令を聞いてから、する予定やったんよな。」

と、大声でみんなに聞こえるように言った。僕を見た先生も「そう」と返して、授業が進んでいった。授業中は、ずっとあぶなかつたと思っていた。でも、友だちがなにもいってくれなかつたらと考えたら、ずっと「ありがとう」と唱えていた。

その次の日くらいに、ミニ運動会があった。もちろん、学級委員の僕は司会をすることになっていた。だけど、僕が「緊張しい」と理解してくれていたペアの学級委員の子が、代わりにすべてしてくれていたのだ。助かった。そう思って、「ありがとう」と言った。

だけど、僕がしてもらっているのは、親切なのか？ 自分を甘やかしてもらっているだけなのか？ そう思っていた。それじゃあ、僕ができることはなんだろうと考えた。

そうだ。僕は声を大きく出すことができる。そして、号令や発表会の代表とかのときに、大きな声を出し、みんなを元気づけよう。これが僕を助けてくれた人、そして僕のことをあまりよく思っていない人に、「僕はがんばっているよ」と見せることができる。そして、僕に「親切」をしてくれた人に、感謝を示そう。

夏休みが近づく7月半ば。号令を毎時間大きくするようにした。すると、クラスのみんなも大きな声を出してくれた。自分に「がんばっているね」と言ってくれる友だちもいた。これが、クラスを引っ張っていくことなのだと思う。

これまで助けてもらった以上に、みんなを助けることにする。そして、大きな声でみんなを元気にする。これが僕にとって、一番感謝を示すことができ、自分自身を奮い立たすことができる方法だと思った。